

第四節 スポーツの裾野の広がり

一 市民レベルで広がる競技スポーツ

開設が相次ぐ
スポーツ施設

兵庫県は、スポーツを、こころ豊かな生活づくり、生きがいづくりを実現するための活動の開設の拡充が求められる中、法人県民税の超過課税を財源として進められてきた、体育館、プール、グラウンドなどを含むCSR（カルチャー、スポーツ、レクリエーション）施設の整備は、超過課税の延長により継続された。この時期に丹波総合スポーツセンター（篠山町（現丹波篠山市）・昭和五十五（一九八〇）年開設）、東はりま青少年館（加古川市・五十七年）、西はりま青少年館（龍野市（現たつの市）・五十八年）、文化体育館（神戸市長田区・六十年）、円山川公苑（豊岡市・六十二年）、淡路ふれあい公園（緑町（現南あわじ市）・平成二（一九九〇）年）、但馬全天候運動場（八鹿町（現養父^{やぶ}市）・六年）を開設した。

これらのCSR施設の中でも、音響・舞台設備が整えられた文化体育館は、スポーツの拠点としてだけでなく、兵庫県内のCSR施設の中心的役割を果たすことが期待され、演劇やコンサートなど多目的な利用が想定されていた。またこの体育館は、神戸市から、昭和六十年のユニバーシアード神戸大会柔道会場建設の依頼を受け、兵庫県立スポーツ会館を拡張して、県が建設したものであった。ユニバーシアード神戸大会では、柔道とバレーボールの会場となった。



写真 133 県立総合体育館

この時期のCSR施設の開設によってスポーツ施設の増加が見られたことは確かであったが、兵庫県スポーツ振興審議会は、県民のスポーツに対する要望を十分に満たすには至っていないと指摘していた。昭和五十七年、兵庫県スポーツ振興審議会は、スポーツの総合施策を展開するための中核施設の建設を建議した。また昭和五十九年には「兵庫県の体育・スポーツ施設の整備計画について（答申）」を作成し、スポーツ施設整備の体系を明らかにするとともに、今後の整備計画を示した。県は、これらの建議・答申を踏まえ、CSR施設の整備とともに、スポーツ中核施設の建設に取り組み、県民のスポーツに対する要望に応えようとした。昭和六十年、いつでも、どこでも、だれでも気軽にスポーツができる、親しみ愛される体育館を目指して、兵庫県立総合体育館が西宮市鳴尾浜に開設された。体育・スポーツの振興を通じ、県民の健康で文化的な生活の向上に寄与することを目的とするこの施設は、大・中・小体育室等のスポーツ施設、研修施設、そして四〇〇人収容可能な宿泊施設を有する特色ある体育館であった。坂井時忠知事が「この種のスポーツ施設としては、全国一の規模と設備」であると誇ったこの体育館は、スポーツ振興のための中核施設として、先駆的役割を果たした。

県が開設した他のスポーツ施設には、天王ダムテニスガーデン（神戸市北区・昭和五十六年開設）、海洋体育館（芦屋市・五十九年）、弓道場（明石市・六十三年）などがあった。また、神戸市立ポトアイランドスポーツセンター（五十六年）、明石中央体育会館（五十六年）、関宮町（現養父市）営氷ノ山国際スキー場（五十八年）、

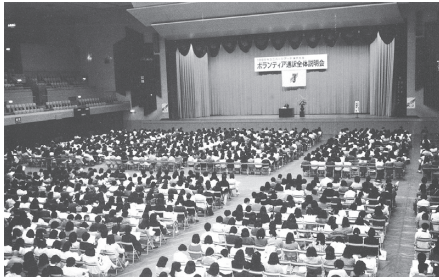


写真 134 ボランティア通訳全体説明会
(神戸市提供)

但東町（現豊岡市）農村勤労福祉センター（五十八年）、神戸総合運動公園（六十年）、姫路市立中央体育館（六十三年）、豊岡市総合体育館（六十三年）、高砂市総合体育館（平成元年）など、市町によるスポーツ関連施設の開設も続いていた。一方で、県は、「ゴルフ場の開発行為に対する取扱方針」を平成六年一月に告示し、ゴルフ場開設による地域振興、スポーツ振興の意義を認めながらも、「豊かな自然や緑の喪失等の環境に対する影響及び限りある県土の有効利用という観点」から、全国に先駆けてゴルフ場の開発申請の新規受付を凍結した。このように、自然環境保全のための規制を伴いながら兵庫県内に拡充されたスポーツ施設は、県民の経済優先から生活重視への価値観の変化、多様化に対応したスポーツ振興の基盤となった。

スポーツ大会の開催
スポーツ大会の開催の一環として、地域、全国、国際レベルのスポーツ大会の支援に努めた。これらの大会は、県民に、

競技者、観客、役員、ボランティアなどの多様なスポーツ経験の場を提供した。これらの経験は、後年に継承され、兵庫県のスポーツ文化の豊かさの底流となった。

昭和五十九年、淡路島内の四球場を会場として、瀬戸内少年野球大会が八月四日から六日までの三日間開催された。この大会は、淡路を舞台とした小説と映画「瀬戸内少年野球団」にちなんで企画され、野球を通し、瀬戸内海を囲む府県の少年たちの友情を育むことをねらいとするものであった。この

大会には、瀬戸内沿岸の二府一二県から、一六の少年野球チームが参加した。県は、この大会を、昭和六十年のくにうみの祭典の前年祭の催しの一つに位置づけ、開催を支援した。

昭和六十年には、大学スポーツの国際大会であるユニバーシアードが、神戸市で開催された。会期は八月二四日（サツカーのみ八月二二日から予選開始）から九月四日までの一二日間であった。実施されたのは、陸上競技、バスケットボール、フェンシング、体操競技、競泳・飛込、水球、テニス、バレーボール、サツカーの計一〇競技であった。大会には、一〇六の国と地域から、四三五二人の選手、役員、審判員が参加し、当時、ユニバーシアードとして史上最大の規模となった。また実人数八三六三人、延べ人数四万二〇四〇人のボランティアが、通訳、受付、身体障害者の介助等の一一の業務に参加し、運営を支えた。このボランティア活動を通して、大学スポーツの大会が、市民、県民ぐるみの祭典となったことは、本大会の大きな特色となった。坂井知事は、過去に例のない規模で実施され、国際交流の場となった本大会のボランティア活動によって、「モノ優先の社会ではとかく見失いがちだった『ともに生きる社会』の建設と『世界平和』を願う希望の灯が確実に点された」と大会後に評した。

ユニバーシアード神戸大会から三年後の昭和六十三年、全国高等学校総合体育大会が兵庫県を中心とした二府四県で開催された。兵庫県では、二六競技のうち一九競技が、一四市四町で実施された。

平成五年八月には、全国中学校選抜体育大会が、近畿地区において開催された。実施された一五競技のうち、兵庫県では、陸上競技が神戸総合運動公園ユニバー記念競技場、水泳が神戸市立ポートアイランドスポーツセンター、柔道が高砂市総合体育館を会場として開催された。これらの三会場は、いずれもこの時期に開

設された新施設であった。兵庫県内に拡充されたスポーツ施設は、中学校年代のトップレベルの競技スポーツ大会の開催にも重要な役割を果たした。

プロスポーツ、企業スポーツの盛り上がり

兵庫県におけるプロスポーツ、企業スポーツには長い歴史があるが、特にこの時期には、野球とラグビーのプロチーム、企業チームが、リーグや全国大会で顕著な活躍を見せた。これらのチームは、県内のファンに観戦、応援するというスポーツの楽しみを広く提供し、他の地域にはまれな豊かなスポーツ経験を県民にもたらした。またサッカーにおいては、市民運動に支えられた新たなプロチームが誕生した。



写真 135 県庁舎中庭でのタイガース優勝報告会

プロ野球では、西宮球場を本拠地としていた阪急ブレーブスは、昭和五十年に悲願の日本一を達成し、五十二年まで三連覇を成し遂げたが、観客動員数は低迷していた。しかし、昭和五十九年のパ・リーグ優勝の年には球団新記録となる九四万六〇〇〇人の観客を集めた。また翌昭和六十年には、甲子園球場を本拠地とする阪神タイガースが二年ぶりのセ・リーグ優勝を果たした。阪神タイガースは、続く日本シリーズでも西武ライオンズに勝利し、日本一を初めて達成した。同年一月に兵庫県庁で行われた優勝報告会には、監督、選手を一目見ようと約一〇〇〇人が参集した。くす玉が割られ、祝日本一と書かれた垂れ幕が降ろされた後、ファンたちは六甲おろしを大合唱した。

平成元年には、神戸製鋼Steelers（以下、神戸製鋼）の活躍が、



写真 136 市民の会によるJリーグ誘致運動を報じる新聞（神戸新聞 平成5（1993）年12月1日）

路大震災発生の二日前であった。

平成五年にJリーグが誕生し、プロサッカーの盛り上がりが認識されるようになると、兵庫県内においてもプロサッカーを誘致しようとする動きが活発化した。平成十四年のFIFAワールドカップの国内開催地に立候補し、神戸市立中央球技場の改修を計画していた神戸市は、Jリーグ誕生以前の平成四年に、プロサッカークラブ誘致を目指すことを発表していた。神戸市のこの計画は、平成五年一二月、神戸に設立された、プロサッカーチームをつくる市民の会（通称・オーレ！KOBE）の活動により支援された。本会は、街頭での活動を通して二万八千三百二通の市民の署名を集め、神戸市に提出した。市民運動によりプロサッカークラブ誘致の機運が高まる中、平成六年三月、川崎製鉄サッカー部の神戸市への誘致が合意され、同年六月三

ラグビーファンに歓喜をもたらした。同年一月、全国社会人大会決勝において、神戸製鋼は東芝府中に勝利し初優勝を果たすと、ラグビー日本選手権でも大東文化大学を破り、初の日本一を達成した。以降、厚い選手層を備えた神戸製鋼は圧倒的な強さを示した。平成六年十一月、同じ兵庫県内で活動するワールドに敗れるまで、神戸製鋼は国内公式戦における連勝記録を七一まで伸ばした。また神戸製鋼は、平成七年までに、全国社会人選手権、日本選手権七連覇を達成した。平成七年一月十五日、神戸製鋼の選手たちは、第三二回ラグビー日本選手権において大東文化大学に勝利し、表彰状を掲げて七回目の日本一を祝した。その記念すべき日は、阪神・淡

十日、ダイエーをメインスポンサーとするオレンジサッカークラブが設立された。クラブ名は公募により決定された。こうして、同年九月、公募により選ばれた、ヴィッセル神戸というJリーグ参入を目指すクラブが誕生した。Jリーグ理事会による準加盟承認、新監督の決定、加入選手らの発表、練習場の整備等を経て、クラブは始動日を迎えようとしていた。予定されていた始動日は、平成七年一月十七日、すなわち震災発生の日であった。

昭和六十三年、県は、スポーツ賞、スポーツ優秀選手賞とは異なる、新たな賞として、スポーツ優秀選手特別賞を創設した。この顕彰制度により、県は、プロスポーツの分野で輝かしい活躍をし、優れた記録を樹立するなどした人の栄誉と、県民スポーツの発展に寄与した功績を称えた。この時期には、昭和六十三年に三人の元プロ野球選手が、平成六年にはオリックスブルーウェーブのイチロー選手が同賞を受賞した。また、平成元年、神戸製鋼が初のラグビー日本一を達成した際には、県は「ほまれ賞」賞を同チームに贈呈した。同賞は、文化、スポーツなどの分野で、県の名と県民の誇りを高めた人を表彰するものであり、スポーツ優秀選手特別賞と同じく昭和六十三年に創設された。

二 生涯スポーツの広がり

高まる健康意識
とスポーツ振興

高度成長期を経て、経済優先から生活文化重視へと社会が変容する中、昭和五十四年の県民全世帯アンケートでは、健康問題が県民の一番の関心であるという結果が示されるなど、人々の健康への関心は高まっていた。県では昭和五十六年の「健康」の予算を前年度に比べ七〇・二％増加



写真 137 体力づくり1万点運動

させるとともに、自分の健康は自分で守るという自覚と認識を県民が高めるために「健康づくり運動」を推進した。昭和五十七年、県議会において文教常任委員会は、県民の健康や体力づくりへの関心と意欲が高まり、スポーツ活動への参加者が増加してきたことを好ましい現象とし、県民の体力づくりを目指しスポーツの生活化の推進が望まれることを報告している。こうした状況の中、更なるスポーツ施設の設置に加え、学校体育設備の開放の促進、指導者養成と指導体制の確立を図り、スポーツが暮らしの中に根付くような施策として、いつでも、どこでも、楽しくスポーツができる「スポーツの生活化」を図るための取組が行われた。昭和五十六年には、体力づくり事業として四十九年度から展開された「健康のカギ」運動に代わる新しい事業として、「体力をためそう」運動が推進された。これは、文部省作成の壮年体力テスト五種目を実施し、

各自の目標を定めて健康・体力づくりを実践しようとするものであった。昭和六十年には、子供から大人まで基礎体力を向上させ、身体的にも精神的にも健康で明るい生活を営むための総合的な健康対策の一環として、「体力づくり1万点運動」や「グリーンスポーツ運動」などの普及啓蒙活動が行われた。

文部省による体力・運動能力調査では、本県の児童生徒は筋力や柔軟性などの基礎体力が以前に比べ劣っていた。「体力づくり1万点運動」は、こうした子どもたちへの運動の勧めであった。小学五年生から高校生を対象に、ジョギング一五〇〇メートルなら一〇点、縄跳び五〇〇回なら一〇点のように種目毎に得点を決め、この得点が一万点になれば認定証を授与し運動の励みにしよう

というものであった。また、児童生徒を指導できる指導者養成にも取り組み、多様化した児童生徒の実態に応じた柔軟な体力づくりを推進することが目指された。

「体力をためそう運動」は、「体力づくり一万点運動」の成人版であった。対象は三〇歳から五九歳の男女で、仕事に追われ運動不足に陥りがちな人々が運動に取り組みきつかけづくりとされた。体力テストをもとに一人ひとりの運動量をチェックし、望ましい運動の指導がなされた。

「健康元年」と位置づけられた昭和五十七年には、県民の健康づくりの意識の高揚と自覚と実践のため各種の施策がスタートした。県民健康増進の中核とも言える「県立健康センター」（神戸市東灘区）がオープンし、健康づくりの殿堂として、健康度測定から医学的検査、体力測定、健康処方が行われた。館内には管理部門、健康度測定、診断、指導部門、プール、体育、トレーニング部門が設置され、医師、体育指導員、栄養士ら専門家を常時配置し、栄養・運動・休養のバランスをとるためのサポートがなされた（平成十六年に民間へ移譲）。昭和六十年には、「兵庫県民健康憲章」が制定され、九月一日を「県民健康デー」と定めた。同年に開設した県立総合体育館においても、県民の健康づくりのための指導者養成、スポーツ医事相談をはじめとする各種相談事業の開催、生涯にわたる豊かなスポーツライフ実現の手助けとしてスポーツ教室開催の事業を展開した。

高まる健康意識は、スポーツの取組方にも影響を与えた。昭和五十五年には、「スポーツの日常化」を進めるため、西宮市、西脇市、三田市、上郡町、山東町（現朝来市）、北淡町（現淡路市）の六カ所で、第一回県民健康マラソン大会が市町教育委員会主催で開催され、約二五〇〇人が参加した。この大会は、前年度ま



写真 138 第1回県民マラソン

で行われていた六甲山マラソンのようにタイムを争う競技性の高いものではなく、一三〇〇メートルから七〇〇〇メートルと比較的短いコース設定がされた。親子ペアの部、歩け歩きの部などに幅広い年齢層が参加し、各々の体力に応じたコースに分かれて完歩走することを目的とした健康・体力づくりのための大会であった。「県民健康マラソン大会」や「体力をためそう」などの施策により、老若男女を問わず家族ぐるみでスポーツに親しむ動きが広がっていった。

同年一月には全国トリム・マラソン大会が、県立明石公園陸上競技場を中心に開催され、三歳から八〇歳までの約一三〇〇人が参加した。この大会は、ジョギングブームに因って総理府が全国持ち回りで毎年実施していたもので、県内では初めての開催であった。種目は、一〇キロメートルを歩く「ファミリー歩け歩け」、タイムを競う五キロメートル走、一〇キロメートル走、そして二キロメートルのジョギングの四つで、体力に応じて楽しめるのが特徴であり、参加者の半数以上が家族連れであった。五キロメートル走には車イスの二人が参加し完走した。

この頃、夫の単身赴任により自宅に残り家事育児を担うことになった女性に目を向けたスポーツ活動が行われるようになった。県立嬉野台生涯教育センターでは「うれしのレディース・スポーツ教室」が開催され、「友の会」で子供を預かり、参加しやすい時間帯に卓球やバドミントンが行われた。また、「スポーツの生活化」の施策の一つとして取り組まれた学校開放では、夜間開放五校を含め、八五の県立学校の体育施設が一



写真 139 ねんりんピック '88

般開放され、市民がスポーツを実施する場の拡大が図られた。

いきがいととしての
スポーツの定着

昭和六十一年、兵庫県知事の貝原俊民により「こころ豊かな人づくり県民運動」がスター
トした。人生八〇年時代を拓くすこやかな社会づくりの取組は、「すこやかな長寿社会
を創ろう」として、行動指針「人生八〇年いきいきプラン」が策定された。これまで高齢者が親しめるスポー
ツとして実施されてきたゲートボールに加え、少人数で熟年でも楽しめるフランス生まれの球技であるペタ
ンク、規格化されたコースを必要とせず初心者でも取り組めるグラウンドゴルフなどのニュースポーツが広
がりをみせた。

昭和六十二年には、翌年に開催される全国健康福祉ひょうご大会、「北摂・丹波の祭典（ホロンピア'88）」
のプレイベントとして、「長寿社会における健康福祉を創造する」をテーマに、
北摂・丹波健康福祉まつりが三田市、吉川町（現三木市）、氷上郡・多紀郡一〇
町で行われた。その一環として、スポーツを通じて仲間づくりを進める「県民
長寿体育祭」が行われ、ゲートボール、スローイングボールなど高齢者が親し
みやすいスポーツから陸上競技、剣道、軟式庭球などのスポーツまで計一四種
目に約三〇〇〇人が参加した。

昭和六十三年には、第一回全国健康福祉祭ひょうご大会（ねんりんピック'88）
が神戸市、姫路市をはじめとする四市一町で、「いのち輝く長寿社会」をテーマ
に開催され、全国から七万九〇〇〇人の高齢者が参加した。健康関連イベント

の中心として行われた「スポーツ交流大会」では、卓球やテニス、ゲートボールなどの大会が行われた。また、高齢者に適した運動や正しいトレーニング方法を指導する「健康づくり指導教室」が、スポーツ交流大会の開催会場で行われた。「ふれあいスポーツフェア」では、ルールも簡単で場所も取らず気軽にできるスポーツとして、ローンボウルズ、ホースシュー、フリーテニス、シャツフルボード、インディアカなどが紹介された。

平成二年、第二期貝原県政がスタートし、人生八十年時代に対応した健康・福祉社会の構築のため、「寝たきり老人ゼロ」達成に向けた地域リハビリテーション体制の充実強化を図ることを掲げた取組が行われた。このように、高度成長期を経て、経済優先から生活文化重視へと社会が変容する中、高まる健康意識、高齢化社会などへ対応しながら、健康のためのスポーツ、生きがいとしてのスポーツが定着していった。

三 障害者スポーツの展開

昭和五十六年は国連により「国際障害者年」と定められ、翌年「国際障害者行動計画」が採択された。そして、この計画の実施を推進するため「国連・障害者の十年」を宣言し、計画的な課題解決に取り組むことになった。こうした動きはスポーツにも影響を与えることになった。

昭和六十年、国際オリンピック委員会（IOC）は、オリンピック大会開催年に国際調整委員会（ICC）が開催する国際身体障害者スポーツ大会をパラリンピックと名乗ることに同意し、パラリンピックは国際身体障害者スポーツ大会の正式名称として使用されることになった。また、障害者のスポーツ大会が、リハビ



写真 140 車いす使用者スポーツ大会

リの延長ではなく競技性の高いスポーツ大会となることを望む声の高まりにより、昭和六十二年にI O Cに特別委員会が設置され、平成元年に国際パラリンピック委員会（IPC）が創設された。このように、身体障害者のリハビリの延長から始まった国際身体障害者スポーツ大会は、競技性の高いスポーツ大会パラリンピックとなったのである。

こうした国際的な状況と並行して、国内での障害者のスポーツ活動にも様々な変化がみられた。昭和五十五年には、日本チェアスキー協会が設立され、第一回チェアスキー大会が開催された。昭和五十六年には第一回大分国際車いすマラソン大会開催、日本スペシャルオリンピック委員会発足（平成四年解散）、日本肢体不自由者卓球協会が設立された。昭和五十七年には、第一回全国盲人マラソン小田原大会、国立療養所箱根病院・神奈川県総合リハビリテーションセンター間での車いすツインバスケット親善試合、第一回大阪車いすトラック競技選手権大会などが開催、日本盲人マラソン協会が設立された。このように、国内における障害者のスポーツは、種目と競技性の幅が広がり組織化が進められていった。

兵庫県では、昭和五十六年、国際障害者年を記念して第一回兵庫県車いす使用者スポーツ大会と第十九回兵庫県身体障害者スポーツ大会が、県立丹波総合スポーツセンターで開催された。最高齢七八歳をはじめ、県内各地から約四〇〇人が参加し、水泳、卓球、車いす競技など、八競技に熱戦が繰り広げられた。昭和五十八年には、第一三回兵庫県車いす使用者スポーツ大会

が、兵庫県身体障害者スポーツ協会の設立五周年記念を兼ねて実施され、県内各地から七九人の選手が参加、スラローム(車いす障害物競争)など五種目が実施された。この大会では一六の大会新記録が誕生し、その年に群馬県前橋市で開催される全国身体障害者スポーツ大会への派遣選手を選考した。

また、障害者の活動を広げるために施設設置が進められた。昭和五十九年には、国際障害者年の記念施設として、浜坂温泉保養荘が建設された。障害者と家族のくつろぎの場としてオープンしたこの施設は、宿泊室や各種の機能回復訓練器具を備えたトレーニング室の他、大小四つの浴室、ゲートボール場、ビリヤードなどを完備し、バスケットボール大会、ハイキング、スキー教室などのイベントを開催した。昭和六十年には、市立として県内初の障害者優先スポーツ施設である西宮市総合福祉センターが開設された。これは全国では大阪、下関、名古屋、広島、福岡、東京多摩に次ぐ七番目のことであった。その後、尼崎市立身体障害者福祉センター(昭和六十年)、伊丹市立障害者福祉センター(平成三年)、明石市立総合福祉センター(三年)、神戸市民福祉スポーツセンター(六年)など、市立の障害者優先スポーツ施設の整備が進んだ。全県的な地域リハビリテーション体制を拡充する中で、平成四年、兵庫県玉津福祉センターは兵庫県立リハビリテーションセンターに改称され、翌年、体育指導課は新設された自立生活訓練部へ移管された。また、昭和五十二年の神戸市の「神戸市民の福祉を守る条例」の基本理念である「自立と連帯」を、具体的な施設整備を通じて実現するために「しあわせの村」が建設された。これは、老人、児童、障害者のための福祉施設と、全ての市民が楽しめるレクリエーションやスポーツ、憩いの施設を一体的に整備し、市民の交流の場とする総合福祉施設である。



写真 141 車いす社交ダンス

一方で、障害者の健康づくりという課題への取組も始められた。昭和六十年には、身体障害者の積極的な健康づくりをねらいとした「身体障害者トリム運動」が始められた。兵庫県玉津福祉センターが、センター内にある勤労身体障害者体育館の開設十周年の記念事業として実施したもので、全国初の試みであった。散歩からハイキング、卓球、バスケットボールなど、一人ひとりの障害とその程度、趣味にあわせて選べる二の運動メニューを指定した。県内の福祉事務所、福祉関係団体に備えつけられている申請書を受け取り、得点カードの百のマス目が埋まったら修了証と記念シールが贈られた。運動する機会に恵まれない在宅の身体障害者に、身近に施設がなくても、指導者がいなくても、家庭や職場で健康を高めるための契機としてようと計画されたものであった。また、同センターでは一五のスポーツ教室を開き、スポーツ相談にも応じるなど積極的な活動を行っていたが、昭和六十三年には月二回休日を利用して「車いす社交ダンス講習会」を開催するなど、これまで車いすで実施されたバレーボールなどのスポーツ以外にも車いす使用者が体を動かす取組の拡大が模索された。当時、車いす社交ダンスは、教本など手本になるものはほとんどなく、振付は講師がオリジナルで考えたものであった。

こうした障害者スポーツの活動を関連団体で意思疎通を図り進めるため、平成三年に兵庫県障害者スポーツ連絡協議会が設立された。

昭和六十二年、翌年に開催される第一回「全国車いすマラソン大会」のプレイベントとして、「近畿車いすマラソン大会」が篠山町で開催され、招待



写真 142 フェスピック神戸大会開会式
(神戸市提供)

選手を含む八一選手がフルマラソン、ハーフマラソンに参加した。この大会は、レースに出場しない障害者たちによる、グラウンドでの歌や踊りの披露や、手づくりの陶器や織物などの展示即売によって盛り上げられた。

昭和六十三年、「北摂・丹波の祭典」「全国健康福祉祭」の一環として第二回「全国車いすマラソン大会」が篠山町で開催された。国内で公認コースを使用して開催するフルマラソンは、この大会と大分国際車いすマラソン大会のみであり、翌年からも同コースで毎年開催されることになった。女性一四選手を含む一一〇選手がフルマラソン、ハーフマラソンに参加し、給水や介助、バイク愛好者グループによる伴走など、約七六〇人の地元の人たちのボランティアによって支えられた。

平成元年、神戸市は「福祉都市づくりの推進」と「市制一〇〇周年」の事業に合わせ、第五回フェスピック神戸大会を開催した。アジア、オセアニアの四一カ国・地域から一六四六人（選手一一二四人、役員四三二人）に上る過去最高の参加があった。また、陸上競技、競泳をはじめ二四種目で二六の世界新記録が誕生した。アーチェリー、陸上競技、バドミントン、フェンシング、柔道、ローンボールド、射撃、サッカー、競泳、卓球、重量挙げ、車いすバスケットボール、車いすテニスなどの競技が、七競技会場、四練習会場で実施され、観客数六五万人、ボランティア実人数三五九三人（延べ人数一万一五三人）を動員した。

このように、障害者のスポーツは、国際的・国内的な動向を受け、競技スポーツとして、また生涯スポーツとして活動が広げられていった。県内で開催された全国大会や国際大会は、ボランティアという「支える」スポーツ活動によって実現されたものであった。

第五節 国際化、内なる国際化の進展

一 「国際国家日本」の地域的取組

自治体間国際交流の体制整備 県及び県内市町と海外の自治体間の姉妹提携、友好提携は、一九八〇年代以降も継続的に増加した。その特徴は大きく四点にまとめられるであろう。第一に、兵庫県と米ワシントン州、ブラジル・パラナ州との姉妹提携を基礎に、両県・州内の自治体間の提携が進んだことである。社町

(現加東市)とワシントン州オリンピア市(昭和五十六(一九八二)年四月)、姫路市とパラナ州クリチーバ市(五十九年五月)、津名町(現淡路市)とパラナ州パラナグア市(六十一年五月)、加西市とワシントン州ブルマン市(平成元(一九八九)年十一月)などがその例として挙げられる。県を窓口として、あるいは県の交流事業に参加する形で、市町レベルでの交流、提携が盛んになっていった。

第二に、中華人民共和国の都市との友好提携が増加していることである。日中平和友好条約の締結(昭和五十三年)を経て、首相の^{おおひらきまよし}大平正芳の訪中に際して日中文化交流協定が署名され、日本から中国への大規模